

書
目
七部注解之序

中村俊定文庫

文庫 18

1006

10

七部集注解
表
通
日





春日解



曙もくく戸叩きあひて執国の方
よりぬわくしぬくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくく
重五の校坊あけく竹垣あけくちかきん
きくくくくくくくくくくくくくくくく

重五の俗世松井もて屋張を名屋の郊外
きくく村の利病なり

清少納言の梅をぬきききききききききき

汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

昌玉

寄屋敷のまねは 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

瑞

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

五

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

三

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

風

汐風よ〜 汐の 汐風よ〜 夕けし 歌 瑞

似城乳をかく 辰明

五

落拂ふ鏡よ人の影うつ

相

やゝとふこゝろ奥かく

五

似城のつらり奥をくく せう海よりさうさうの川井
の初とそとそと身を親し多くを似城と空
ゆきと乳をかくとふくふく心き妙に辰明
と乳も似てとくくくく
讀み似城のつらり奥のさうさうもいふ海に讀み
新室の影うつとくく 御あひ——

落拂鏡を神鏡とくく——新うくくくくく人
影うつとくくくくく奥かくくくくくくくくくく
奥をくく——

多き花よりよきとふくく砂ちり

玉

ゆき白く人かたのゆき多き花より社標まで大町総て
ゆきとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

五考ゆの神と社とくくくくくくくくくくくくくくく

花よ長閑のゆきくく

李風

東に本馬場といふ所の南も買もその家の街に
 横切ると仰るや海への通道は官廳よりして
 日かよ横を抜たりといふ要地候のみよ横を
 する所とて僅かの便利のみよ身代と横を費し
 候よ果ては少くも一と云ふ所は横を費し
 といふ所とて横を抜たりといふ所とてこれハ
 可くも本馬場と仰るなりといふ所
 此等今様にて海に渡らうといふ所は
 年々通はるなりといふ所は
 牛馬

船越つりゝゝ知家わゝゝ

桐

子親西行りゝゝ分りゝゝ

子

船越つりゝゝ知家わゝゝ

至

子親西行りゝゝ分りゝゝ

日

船越つりゝゝ知家わゝゝ

五

横を抜つりゝゝ知家わゝゝ

子の親とては皆然なりといふ所の神を

且其

聖水

ちやうど坂ハ一名 磐石坂と云ふ事云ハハ重信の爲に
 一と 柳ヶ山の橋ハハ重信の爲に
 ちやうど坂と云ふ事云ハハ重信の爲に
 せしむ 柳ヶ山の橋ハハ重信の爲に
 終る事云ハハ重信の爲に
 うけてタタミ又ハハ重信の爲に

[illegible]

爲了

楚

附錄

綢子

水

蒙

[illegible]

板屋の側へと上り仰せめ清水の用より湯破
 とし湯破とせん湯の破いせいのまじりめ
 又
 湯破の中段に湯破人の心なり
 いれん湯破の心なり
 湯破の心なり

日本記曰仁德帝四十

三年百濟之王子養酒公廢鳥之名匠也雄
畧帝之時帛綿紗獻故太秦姓給、

ちきりおのち月ナテ牛乳とて下
 意ハ出ぬとて
 ちきりおのち月ナテ牛乳とて下
 意ハ出ぬとて

表所
りて
之
判
り
人

毒
リ
々
車
い
く
と
一
字

能くそ大津の濱よかき

其果

何やら面白い家園の都人

表所遠くは子々孫々といふくとも要てまぬ
き通ひも心も何れ
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり

移るるも一市井の事と思ひが静なり
定て一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり

晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり
晴るるも一市井の事と思ひが静なり

移るるも一市井の事と思ひが静なり

移るるも一市井の事と思ひが静なり

移るるも一市井の事と思ひが静なり
移るるも一市井の事と思ひが静なり
移るるも一市井の事と思ひが静なり
移るるも一市井の事と思ひが静なり
移るるも一市井の事と思ひが静なり

移るるも一市井の事と思ひが静なり

の秋の風とあそびて秋の風とあそびて秋の風とあそびて

里人よ秋の風とあそびて秋の風とあそびて

はらりさ 浪の音 秋の風

こころびなすの秋の風とあそびて

風いそぎ 春の風 秋の風

里人の秋の風とあそびて秋の風とあそびて

こころびなすの秋の風とあそびて

清く

あそびて秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

秋の風とあそびて秋の風とあそびて

名も勝栗とちやうが軍中の御もくちういぬふ
人ううくち武社の風情を

一役秀吉小田原陣甲斐の山中と村長の御
を御もくちうきさういふたにたふすきうはん
の御もくちうきさう

大年の念佛いふうの御もくちうきさう
もくちうきさう

念佛の行者はあつたつてふきさうきさう
を御もくちうきさうきさう

鈴夕の美奈のたふは御もくちうきさう

都のせりきさうきさう 花粉 筆

鈴夕の美奈とてはあつたつてふきさう
を御もくちうきさう

わねの御もくちうきさうきさう
を御もくちうきさう

つあひきさうきさう 水

こい魂あつたつてふきさう
を御もくちうきさう

まき神の御もくちうきさう

田子孫

全

力
子
子
子
子
子
子

水

都々あるもやきとてふて物うらや
甲今るつゝはをけつてあめを家にとりかへた
いふに西行のうたのうたもあめをけね
し

[illegible]

報恩經曰 是來事六度二月五日

寅時来 丑至午時 歸五月十五日 卯時来 丑至

己時歸七月十四日卯時來蘇區之日十六日

午時歸
八月十五日
九月十六日
十二月廿日

魂をわがまゐるのうへに心を切んとて仲美のうへにあり
たしつゝ白んずるを——カクシとて——清く心細く
乙女をさへるうへに——

あゝいふ事をも原のわなま老人も婦を金座に
さへせし其つは歎けりとも子と最も其日の神代
たゞともるや一帯一室ハ洞と云ふに神といひたり

中をわたりて一旬の風をもちて人々を
 苦しめしむるは

建永の井の末寺の跡に
 草
 土ひくつに宮の山く
 人
 石のくたの月を
 宇
 石の割はく
 宇
 建永の井の末寺の跡に
 草

遊學して老翁たるの處に成興し幸して寧安寺に
 号しお静と号す福とは訪ねられしところなり
 句はなまめし
 吾考の暇のやうな福ありと云ふは別に山は海は海
 のと云ふハ英所多一カと云ふは福あり
 之并の事なりやうと云ふに中れはなり
 次ハ静と云ふと云ふとも云ふのうへに水成中
 大なるれはと云ふとも云ふのうへに月と云ふは
 此のうへに大なると云ふのうへに十六夜と云ふ
 月と云ふはと云ふのうへに大なる月と云ふは

こゝに何ものもなし
静かなるけいけい静かなるけいけい
静かなるけいけい静かなるけいけい
静かなるけいけい静かなるけいけい
静かなるけいけい静かなるけいけい

二月十六日 旦暮より田舎へ

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

静かなるけいけい静かなるけいけい

之
遠
近

歌をうたふ

張

[illegible]

あり
く
る
る
る
る
る
る

まふのほろ 文

茅の穂をなすのこ

抄

くをいふは君のうまき人なり

己のあはれ
 己のあはれ
 己のあはれ

磯子松鑑の語の集りて

天竺水

余とて一と云ふ所のものも、世つとて、神を
たゞ言ふの事、一と云く、勿論其れも水辺の用な

おきり されに文章のいふ御座る 其のほ
心の御座るいふ御座る人といふ文章のいふ
其代のわういふ御座る御座るいふ御座る
これのと海に なる御座る御座る御座る
いふ御座る

紀伊岩代
結城

其代の御座る御座る御座る
いふ御座る御座る御座る

いふ御座る御座る御座る
いふ御座る御座る御座る
いふ御座る御座る御座る
いふ御座る御座る御座る

秋の御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る

結城の御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る
御座る御座る御座る御座る

源順に 源順に 源順に 源順に

能登る後四位也和名之とて人利ある世の五
新仙古今之離文の文人

永観元年辛酉七十一歳
智人云和名抄著作

菊の香がさきなりとて秋のさきとてつとて和名
抄秋之和名なりとてつとてつとてつとてつとてつとて
は和名の和名なりとて

次ハ和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

次ハ和名の和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて
和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

和名抄和名なりとて和名抄和名なりとて

此等少頃、四宮、唐輪、とて、四宮ハ、清也
 正月ハ、別、の、月、と、て、まゝ、と、て、事、と、て、旅、人、の、と、て、ぬ
 う、と、て、を、記、と、て、て、

次：喜はるとして室の振ふゆゑに
 道々喜はるともて御印

永のくし高瀬のくし
四のくしりくきふくし
多のくしりくきふくし
一のくしりくきふくし

紹興

水

まゝおもしろく
やうな

文

滝を穿て宋おまけて音とん

L

山女名の差を控へれ

榮

七
 三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

文

楚可致也

人

一書、或曰信子入金とて大島尾沼歌と号
 東山居士供て著るは安一は利休の跡に
 て京四條奥の宮に居る大島尾と号利休之

[illegible][illegible]

是れ其の所の滝をいふなり
 此の所の滝をいふなり

鳥苔イワノリ 生石及水間隱處青如夏而草茸然
 天ノ也 拟苔 非苔以別石衣也長四五寸許
 蓋瓦シラ 生石上者也

むらりゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに
はむらりゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに
の業もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに
次は情もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに
世もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに
世の情もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

新毎の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

春の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

風の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

春の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

風の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

春の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

風の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

水

春の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

風の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

春の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

風の夜食もゝゝとす人まて名利は遠く夜食もに

とくはていつくとき約深く身を解き
あつたまの偏りより一歩智をも進みんと
あまの美水浴と仰ぐうう海へ情けなり
うき世のさる余情もいへ

解を食つて程よる各 茶

山をたふすゆへにたふす 文

あふに思ふもを春へ 子

美水浴といふもいつく解を食つて程よる

山に花とまゝの如く定めの持ち手に解をたつと
いふはうと凡程の如く其の句をもち
わくもいふ

遊加 二月十九日 舟車亭

山吹のつらき 祖のあそび 越人

味水飲まり 舟車

昔もふたつ 通子 柳り 眼 喉 元も 味の水
の ちりり ちりり ちりり

め月や 餅 柳り 舟車 柳り

柳り 舟車 の 柳り 舟車 柳り

才に 柳の 柳り の 柳り 柳り 柳り 柳り 柳り

深山の柳り 舟車

柳り 舟車 の 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車

柳り 舟車 の 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車

舟車 舟車 の 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車

舟車 舟車 の 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車 柳り 舟車

月なきやのつとなくの
影
影のうづる月なきやのつとなくの影の月なき
つてき

春の句解

昌隆 春はなぬは代のもろ 利を

昌隆は里村氏より下りて元和年中の人
也 春はなぬは代のもろ 利を 連歌の
同出典なり 春はなぬは代のもろ 利を

えりふのふれ競るまゆ 室五

是はたのふれ競るまゆ 室五 是の都へ
優 競るのめふれまゆ 室五 是の都へ

魏豹傳曰人間一生如白駒過隙身

袖もろのちを里村のちをりか 昌五

今更らうの機。少蝶のやうに

五

長きうらなをばしの御前。降はるるまゝ宿
とち句

多治の梅をすけ。春

杜

その振果抄。西行をもとの人の近き。なる。四
く。き。う。な。を。ば。し。の。御。前。降。は。る。る。ま。ま。宿

梅より梅はよき。詠め。うれ

五

その新例。うれ。梅のよき。詠め。うれ

山切の多梅。うれ。夕にうれ

五

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ。多梅。うれ。うれ

注。山島の姫の祈り

多梅の夕にうれ

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

五

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

五

多梅の夕にうれ。うれ。夕にうれ

ハツをちる候風の画をて

具はるる所の多し月日如

一やふく血とけりねたこととてふこととてふこととてふこと

待て

此の如く唐桑をてててて

花

此の如く唐桑をてててて

言はるる花の子の如く

花

此の如く花の子に花を妻よあてておけり

花の如く花の子に花を妻よあてておけり

花の如く花の子に花を妻よあてておけり



